

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あなたのふるさとはどこですか？」

いま自分が暮らしているまちがふるさとだという人もたくさんいるでしょう。他の地域に引越したけれど、自分が生まれ育ったまちがふるさとだと考えている人も多いと思います。都会で生まれ育った人にとっては、おじいちゃんやおばあちゃんが暮らしている両親の田舎(出身地)をふるさとだと感じている人もいるかもしれません。

では、「ふるさと」という言葉からどんなイメージが思い起こされるでしょうか？ 自然に囲まれた緑豊かな風景、都会では味わうことのできない郷土料理、大人も子どもも参加するお祭りなどの伝統行事、会えば気軽にあいさつが交わされるご近所同士の親密なつながり……。そういった有形無形の財産が日本のふるさとはたくさん残されています。

そんな素晴らしい日本のふるさとが、いままさに歴史的とも言える大きな転換期を迎えています。

たとえば、地方のまちの商店街。三〇年くらい前まで、そこは地元の人たちが集まる活気に満ちた場所でした。し

かし、日本の各地の商店街は空き店舗がどんどん増え、締め切った店が軒を連ねるシャッター街となってしまうところがたくさんあります。夕方六時を過ぎると照明が消えてしまうアーケードも珍しくありません。

Aなぜ、商店街はさびれてしまったのか？ 価値が多様化し、次から次へと新製品が生まれてくる時代になったことで、何を仕入れて店頭に並べればお客さんに満足してもらえるかが見えにくくなったことも一因とされています。その結果、商店街の店主は、普段から店に足を運んでくれる人だけに向けた商品しか扱わないようになる。これでは、新たなお客さんを獲得することはできなくなっています。

1、次から次へと生み出される新製品を求めるお客さんは、どこで買い物をするのか？ 一九八〇年代以降、地方都市の郊外に大型のショッピングセンターが続々とつくられました。大手企業が経営するショッピングセンターは、若い人たちの消費動向を分析し、魅力的な新製品を広い店内に大量に並べます。しかも敷地には大きな駐車場もある。買い物客は、市街地の商店街を素通りし、欲しいものがほとんど揃っている郊外のショッピング

センターへと車で出かけていくようになっていきました。

2、最近では買い物のために郊外型のショッピングセンターにすら行かない人たちが出てきました。インターネット上には、大規模ショッピングセンターをはるかに凌ぐ超巨大な売り場があるからです。洋服も、本も、日常雑貨も、食品も、画面をクリックするだけで買え、なおかつ自宅まで配達してもらえるようになった。

時代の経過とともに、たしかに便利になったことは事実です。でも、この三〇年の間に誰もが便利になったわけではないのです。自分のふるさとにおじいちゃんやおばあちゃんがいる人は考えてみてください。車もパソコンも使えないおじいちゃんやおばあちゃんにとって、郊外のショッピングセンターに出かけたり、インターネットで買い物したりすることは、簡単なことでしょうか？

高齢者の買い物を、歩いて通える地元の商店街が支える。
3、高齢者がインターネットの便利さを享受できるように若い世代が手助けをする。そして、高齢者が培ってきた英知や経験が、若い世代の人生に引き継がれる。子どもからお年寄りまで、「そこに暮らしている」ことに豊かなを感じられるコミュニティ——。

ふるさとは、そんな場所であって欲しいと僕は思うのです。

日本の内閣の中に「地方創生」を担う大臣のポストがつくられたのは二〇一四年九月。「元気で豊かな地方を創生するための施策を総合的に推進するため企画立案及び行政各部の所管する事務の調整担当」というのが、担当大臣の職務の正式な呼称です。ずいぶん長い名前ですね。

ともあれ、「地方を元気にしよう！」というのがこの国にとっての課題になっているわけで、その認識は非常に重要なのですが、政府が掲げている「人口減少に歯止めをかけよう」という方針に対しては、「ちょっと待てよ？」と思うのです。

この一〇〇年間で、日本の人口は三倍に膨らみました。しかし、山奥の村や小さな島といった中山間離島地域では過疎化が進み、人口は二〇〇八年の一億二八〇九万九〇〇〇人をピークに減り始めました。そして、増えたときと同じペースで、これからの日本の人口は減り続けるといわれています。総務省の「人口推計」では、二〇五〇年には一億人を割り込む見込みです。国立社会保障・人口問題研究

所のデータでは、二一〇〇年には五〇〇〇万人程度にまで減ると予測されています。

その予測があるなかで、「出生率を上げて人口減少に歯止めをかける」というのが政府の考え方です。^Cはたして、それでいいのだろうか？

いまの日本は、人口が一億人いることを前提にした仕組みが数多くあります。一〇〇年前から始まった人口増加の流れの中でできあがった社会保障などの仕組みを維持^{いじ}したまま国を成長・発展させるには、人口を減らさない努力が必要になります。しかし、人口減少をやみくもに問題視するのではなく、減ることを「自然な変化^D」としてとらえるほうが、長期的には正しい選択^{せんたく}ができるように思うのです。つまり、いまの国の仕組みを見直しながら、幸せに人口を減らしていくことができれば、新しい国のかたちが見えてくるのではないかと。

僕たちが解決しなければならぬ問題は、人口が減ること自体ではなく、減り方の中で生じる課題をどうやって見つけ、どう乗り越えていくかということです。その状況が、少なくとも二〇五〇年頃^{ころ}までは続くのです。

(中略)

二〇五〇年までの人口減少期において、はっきり見えている課題は二つあります。一つめは、すでに僕らが直面している人口の年齢的偏在^{*へんざい}。高齢者が増え、それを支える若い人たちが少ない状況を、どうやって乗り越えるか。

二つめは、これも始まっている人口の地域的偏在。生産年齢人口(二五〜六四歳)が大都市に集まり、地方に定住しない。これが、ふるさとの衰退^{すいたい}にもつながっているわけです。

コミュニティデザイナーというのが僕の仕事です。これまでに一五〇を超える地域で活動してきましたが、「コミュニティデザイナーです」と名乗っても、「いったい何者だ？」と首を傾^かげられることがよくあります。とくに高齢の人にはピンとこない職業なのでしょう。ですから、こんなふうに自己紹介^{じしやうかい}をするようにしています。

「みなさんの暮らしているまちが元気になるためのお手伝いをしています」

関わったまちのほとんどは中山間離島地域です。言ってみれば、全国各地のふるさとが僕の仕事のフィールドになります。

(中略)

デザイナーといひながら、モノをつくるわけではない。当初は、怪しい人間と思われることもありましたが。それでも、日本の各地で元氣を取り戻したふるさとの事例が現れてきたことで、コミュニティデザインという仕事への認知度も少しずつ高まってきました。そして、「モノ」ではなく「人と人とのつながり」でまちを元氣にする仕事に関心を抱く若い人たちも増え、二〇一四年四月には東北芸術工科大学に日本で初めての「コミュニティデザイン学科」も誕生しました。

「ふるさとを元氣にする仕事を生み出すこと」

これが、コミュニティデザイン学科の方針です。そして、学科長となった僕は、学生たちを指導しながら「頼もしい!」と感じています。

年配の有識者の方々と話をする、「人口は増えなければならぬ」「経済は上向きを維持しなければダメだ」という価値観が根強く残っていると感ずることが多々あります。戦後の日本の高度経済成長を知る世代は、成長戦略こそが豊かさへのシナリオだと考えているように思えて、

がっかりさせられることがしばしばです。

それに対して、いまの学生たちは「現実をしつかり見ています。一九九〇年代初頭に崩壊したバブル経済の幻想を再び追い求めることもなく、不景氣と言われる二一世紀を自分が置かれた日常としてとらえることができる。いわば、不景氣ネイティブです。だからこそ、人口が減り続けているこの時代にふさわしい、拡大路線とは異なる「豊かさ」というものを創造できるに違いないと僕は期待しているのです。

(山崎亮『ふるさとを元氣にする仕事』による)

【注】

*アーケード——天井を屋根などで覆った商店街。

*動向——個人や社会がこれから動いていく傾向や方向のこと。

*享受——利益などを受け取り自分のものとする。

*中山間離島地域——農作物をつくるまとまった土地や人口が少ない山間部や離島を指す。

*偏在——かたよってある場所にだけ多く存在すること。

問一 空欄

1

3

にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ つまり ウ では エ ところが

問二 — 線部A「なぜ、商店街はさびれてしまったのか？」とあるが、その理由は何か。解答欄に合うように、文中から書き

抜いて答えなさい。

問三 — 線部B「豊かさを感じられるコミュニティ」とあるが、筆者が期待する「豊かさ」の具体例として、最もふさわ

しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 高齢者が若者の力を必要としなくなり、インターネットで若者に人気の製品を自由に大量購入できる。
- イ 高齢者のネット購入を手伝っていた若者が、廃品はいひんを上手じょうずに利用している高齢者の暮らしの知恵ちえを学ぶ。
- ウ 高齢者よりも若者の人口増加を期待して大型スーパーを作り、売り上げが伸びて街の経済力が上がる。
- エ 高齢者は家で、若者は大型ショッピングセンターで、世代ごとに場を分けて好みの買い物が自由に楽しめる。

問四 ― 線部 C「はたして、それでいいのだろうか？」とあるが、なぜそのように思ったのか。次の文の空欄にあてはまるふさわしいことばを、文中から書き抜いて答えなさい。

人口減少は、① ととらえて、② 自体を問題としないで、③ の中で生じる課題を見つけ、乗り越えることが大切だから。

問五 ― 線部 D「やみくもに」とあるが、このことばの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おそろおそろ イ できるかぎり ウ もらすことなく エ わけもわからず

問六 ― 線部 E「頼もしい」とあるが、なぜ筆者は有識者よりも学生たちを頼もしいと感じるのか。「不景気ネイティブ」(ネイティブ＝生まれながらの)ということばの意味を考えて説明しなさい。

問七 線部 X「人と人とのつながり」でまちを元気にする、Y「人口が減り続けているこの時代にふさわしい、拡大路線とは異なる『豊かさ』というものを創造できる」とあるが、人口が減少する中でふるさとに暮らすことの豊かさを、人とのつながりから説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字にしましょう。

- ① オウボウなふるまいをする。
- ② 教科書をロウドクする。
- ③ 顔ニンシヨウの機能がついている。
- ④ 問題のナンイドを上げる。
- ⑤ 彼^{かれ}に仕事をマカせる。